

山東西部における刻経事業について

はじめに

秦、嶧、徂徠の山並が山東西部の脊梁を形作る中それらの支脈の西辺を黄河の水が北東へと流れる。この黄河流域を東端としまし北界とした山東西部の南北にわたる地内に、一九九〇年代半ば以降次々と北朝後期の仏經石刻が発見されている。この地の仏經石刻は造像を離れて仏經の字句乃至仏名等を岩石に刻むことを主体としている。本小論ではこうした刻経の全体を具体資料によって把握しつつ、それらを興した人々の実態とその展遷、またこれに関わる鄴都の仏教やその歴史的な意味について前後の二章に分けて考述を試みたい。

I 山東西部における北朝後期の仏經石刻

山東地方全体を鳥瞰すると、概ね各地の花崗岩山岳の半腰、麓部には石窟造像が、山岳を離れたより低平な地には造像碑などのものが建造される傾向が見られる。これらは僧衆の活動する寺院等の所在とも関わるようであるが、北朝後期の仏經石刻の分類はそれらの中の二、三を除けば概ねものが岩塊の露われる山東西部の山丘の麓部に修造されている。

田熊信之

本章では、先ずその所在の把握と刻字内容を通覧し、次いでその刻成年代と修造者の実態を確認して、さらにその現状と内容を含めた展開の特質について考察を進めたい。

一 その所在と遺址、刻字の現況

現在遺存が確認されるものを総集すると、約三〇の地点の一一〇余の書刻が把握される^{〔注1〕}。それらは次表に示す通りである。

【表1】 佛經刻字（含 摘刻語句等）

遺址等	經句等原拠	譯出者	刻成時期
旧曲阜勝果寺	金剛般若波羅蜜經	姚秦鳩摩羅什	東魏天平四 (五三七) 正月
濟南黃石崖摩崖	大般涅槃經 聖行品 無常 偈	北涼曇無讖	東魏(北齊)
同	妙法蓮華經 普門品	姚秦鳩摩羅什	東魏(北齊)
臨朐明道寺遺址	妙法蓮華經 序品 佛弟子 名	姚秦鳩摩羅什	東魏
同	大方等陀羅尼經 佛菩薩名	北涼法衆	東魏

東平司里山	大般涅槃經 聖行品 無常偈	北涼曇無讖	北齊（皇建以前）
同	小品般若波羅蜜經 摩訶般若波羅蜜明呪品	姚秦龜茲國三藏鳩摩羅什	北齊（皇建以前）
同	大般涅槃經	北涼曇無讖	北齊（隋）
平陰洪頂山	文殊師利所說摩訶般若波羅蜜經 文殊師利所說般若波羅蜜經 三種	梁扶南三藏曼陀羅仙、同僧伽婆羅	北齊天保（河清）
同	摩訶衍經（摩訶般若波羅蜜經問乘品）	姚秦龜茲國三藏鳩摩羅什	
同	佛說仁王般若波羅蜜經 受持品	姚秦龜茲國三藏鳩摩羅什	
同	大集經 穿（海慧）菩薩品	高齊那連提耶舍	
同	式佛名（維衛佛、安樂佛）		
東平海檀寺	妙法蓮華經 普門品（觀音經）	姚秦龜茲國三藏鳩摩羅什	北齊皇建元年（五六〇）一月二三日
泗水天明寺	維摩詰所說經 見阿閼佛品	姚秦龜茲國三藏鳩摩羅什	北齊皇建元年（五六〇）一月二〇日
巨野石佛寺	大方廣華嚴十惡品經 迦葉菩薩品		北齊河清三年（五六四）七月八日
兗州泗水出土	文殊師利所說摩訶般若波羅蜜經、文殊師利所說般若波羅蜜經 四種	梁扶南三藏曼陀羅仙、同僧伽婆羅、等	北齊（北齊）
同	佛說觀無量壽佛經 引句	宋西域三藏量良耶舍	北齊？
東平銀山	摩訶般若波羅蜜		

新泰徠山 麓（光化寺域）	大般若經（大般若波羅蜜經）	姚秦龜茲國三藏鳩摩羅什	北齊武平元年
同 英佛巖	文殊師利所說般若波羅蜜經	梁扶南三藏僧伽婆羅	北齊武平元年
汶上 水牛山	文殊師利所說摩訶般若波羅蜜經（摩崖）	梁扶南三藏曼陀羅仙	
同	文殊師利所說般若波羅蜜經	梁扶南三藏僧伽婆羅	
鄒城嶧山 五華峰	文殊師利所說般若波羅蜜經	梁扶南三藏僧伽婆羅	北齊河清三年
同	般若		？
同 妖精洞	文殊師利所說般若波羅蜜經	梁扶南三藏僧伽婆羅	
鄒城 尖山	文殊師利所說般若波羅蜜經	梁扶南三藏僧伽婆羅	北齊武平五年
同	思益梵天所問經	姚秦鳩摩羅什	
同	大般涅槃經 聖行品 無常偈	北涼曇無讖	
同	文殊般若		
鄒城 陽山	文殊師利所說般若波羅蜜經	梁扶南三藏僧伽婆羅	
鄒城 鐵山	大集經 穿（海慧）菩薩品	高齊那連提耶舍	北周大象元年
鄒城 葛山	維摩詰所說經 見阿閼佛品	姚秦鳩摩羅什	北周大象二年
滕州 陶山	般若波羅蜜		
滕州 龍山	文殊師利所說般若波羅蜜經 只刻三字	梁扶南三藏僧伽婆羅	北齊代
泰山 經石峪	金剛般若波羅蜜經	姚秦鳩摩羅什	
鄒城 崗山	佛說觀無量壽佛經	宋西域三藏量良耶舍	北周大象二年
同	入楞伽經 請佛品	元魏天竺三藏菩提流支	北周代？

【表2】佛名刻字

遺址等	佛名
平陰 雲翠山	大空王佛
平陰 洪頂山	大空王佛（北峰一、南峰四） 大山巖佛、高山佛、安王佛、式佛（維衛佛、式佛、隨葉佛、拘樓秦佛、拘那含牟尼佛、迦葉佛、釋迦牟尼佛、弥勒佛、阿弥陁佛、觀世音佛、大勢至佛、釋迦牟尼佛、具足千万光相佛、安樂佛）、藥師瑠璃光佛（北峰）
平陰 書院東山	大空王佛
平陰 天池山	大空王佛
平陰 二鼓山	大空王佛
平陰 大寨山	阿弥陁佛
寧陽 神童山	弥勒佛、大空王佛、華光佛
新泰 徂徠山山麓	大空王佛、弥勒佛、觀世音佛
新泰 徂徠山英佛巖	（般若波羅蜜）
鄒城 嶧山五華峰	（文殊般若）（般若）
鄒城 尖山	大空王佛
滕州 陶山	阿弥陁佛、觀世音佛、（般若波羅蜜）
（徐州 雲龍山）	（阿弥陁佛）
鄒城 崗山	大空王佛、阿弥陁佛 釋迦文佛、弥勒尊佛、阿弥陁佛

*【図版1】～【図版6】 参照

こうした各々の書刻の立地そのものや、その環境を類別すると、概ね次のような結論が得られるように見える。

- * 山巔、山上（頂部）の浄明な地の小刻（雲翠山、大寨山、神童山 等）
- * 山麓、山下（阜丘）の閑寂な地の大刻（洪頂山、鉄山、尖山 等）

二 その刻成年代と修造者の実態

では、ここで、こうした遺刻の刻成年代と修造者の実態を確認してみた。

山東西部地域に遺存する北朝末の（一部小造像を伴う）刻経、仏名刻字は半ば以上が無紀年である。しかし、刻成年代或いは修造年代を記し残すものの内に修造にかかわる事柄を少しく綴るものがある。それらは次表【図版2】【図版4】【図版5】参照の如きであるが、それらを一覽すれば知られるように、そこには、経主、像主、齋主、仏心主、建心主、邑主、邑子、維那、都維那等々と修造に関した各種の呼称の刻出が見られる。比丘僧、比丘尼に主導され、地方の有力者及びそれに関わる在俗者がかなりの数結集、組織されてこれが起こされていることがわかる。

【表3】題記、願文 等（主要刻字部分）

東平海檀寺碑

「大頌主 劉珍東 大建心主 張曇岳／大都維那 張法敬 大都維那
張苗／大都維那 王遵義二百人等／敬造經像一區」
「願今善（力）使国祚永□□獲益□□蒙恩眷属、美受天福、一切衆生、齊登彼岸……」

寧陽水牛山碑

「經主白石寺比丘□□他□□□□高方太□□石窟寺主法高□□□□、
邑人兗州主羊穆□□邑人羊釋子□□□、經主歷威將軍兗州東陽平太守□州
五城郡太守太山羊鍾、郡功曹東市貴、邑人奉朝請羊善、邑人羊万歳、白石

寺□□朔建□□□比丘、……………中正東扈姜……………龍華寺□起東□□持□□
□大……………中正……………東願……………東三……………明達、都維那東……………」

兗州泗河出土經碑

「邑子別肆 邑子……………／邑子……………／」

兗州泗河出土造像記断石

「……………於沙丘東城之内、優婆夷比丘尼之寺、率彼四衆、奉為 太上皇帝陛下、
師僧父母、俾閤含靈、一切有識、於是 法堂魏魏、廊廡赫奕、磊落而重疊、
峨峨以連屬、又乃敬造阿彌陀連座三佛。……………」

東平司里山造像銘

「佛弟子□類□／敬造弥勒下生／皇家師僧父母／尊爲一切衆生／道善願」

* 参考 泗水建興寺 軌禪師碑（比丘尼智度等造像碑）（武平五年（五七四）七月二

二日戊寅刊書誌）

○ 像主比丘尼智度／像主比丘通□

○ 像主比丘尼僧練／菩薩主□□圓□道休□

○ ……大聖滅應歸真……………自尔以來餘逕千記、今像教之中、齊國大沙
門建興寺軌禪師、絕德峻巖、越万嶺而抽峯懷珠、演說若千河、……
故能廣發四弘之慈悲、拔彼衆生猛炎之湯炭、復能合率道俗一百人
等、恨生身不值佛……………道俗人等敬造金像廿軀、造玉石像廿軀、造
一切經□□并像五軀、以此功德、仰忝皇帝陛下□□官□郡令長、
師僧父母、一切衆生、蠢動之源、同□聖道法義人等、仰寄慈□
轉□流名後代

これらの刻経は、東平、陳留、任城、河間、兗、鄒、魯等に活動を進め
た僧衆、殊に僧太、道顛、僧安、法洪、道門、僧齊、僧岸、僧万、比丘尼
法高、法會らに導かれたものであり、これを支えた人々が、在地の権門で
ある太山の羊氏、鄒魯の韋氏、李氏、魯郡と係わりのある唐氏を始めとし
た太守、刺史、郡中正及びその府下の属領、主簿、功曹また衆人である。
こうした地方の豪族等との脈絡の中から山東の仏徒、殊に僧安らの集団と
中央の貴顕、例えば高元海や唐邕、趙妃、陳徳成、徳信、董妃などとの繋
がり得られていった可能性があることは次章で記述することにした^{〔注2〕}。

三 その形状・内容と展開の特質

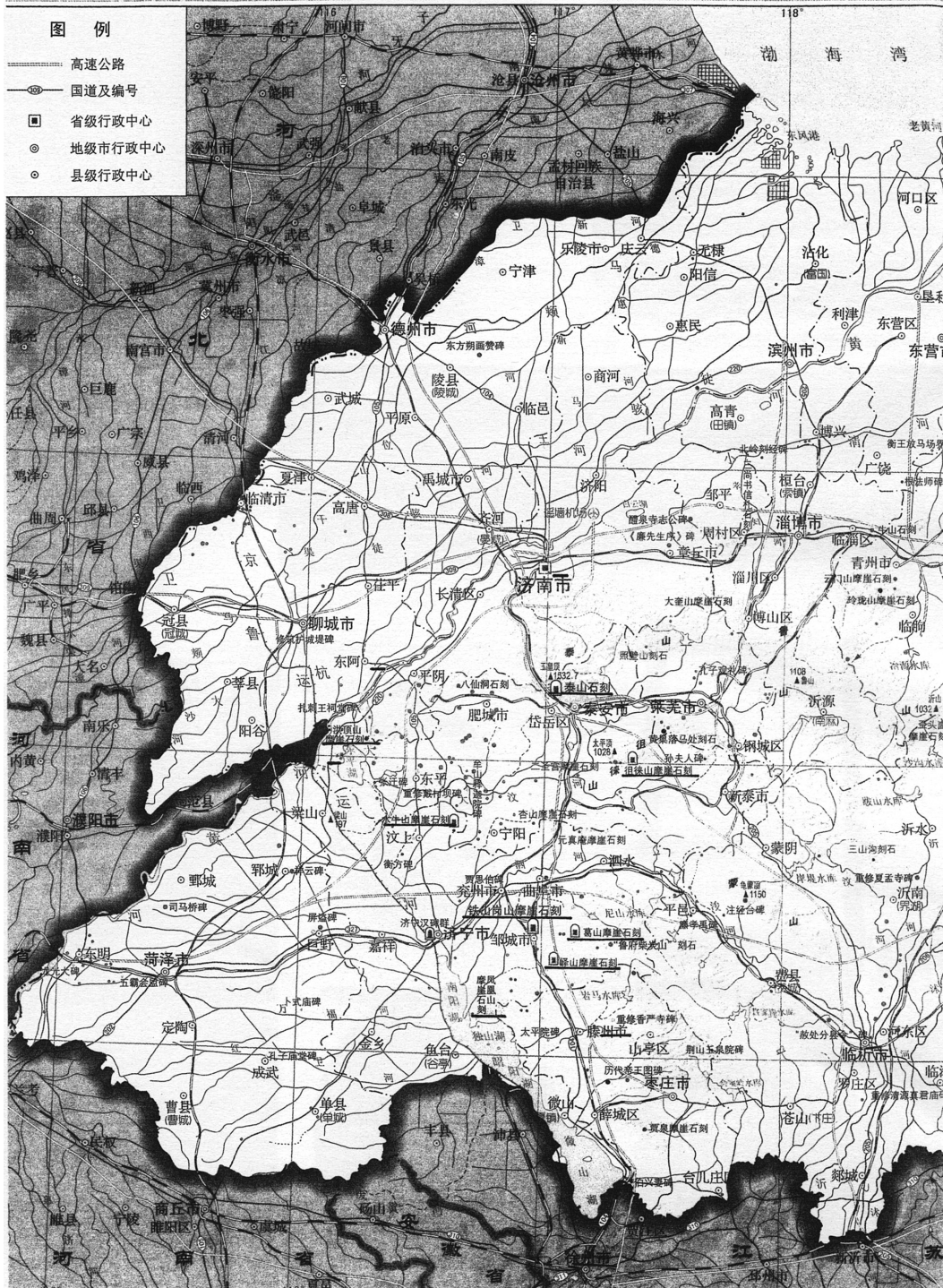
さて、刻成遺品について、ここでその形状と内容とを確認しつつ、その
展開が如何様であったかを省察してみよう。先ず形状等であるが、それら
は、概括すれば、

- ・ 形状 碑 摩崖（仏堪、仏龕、小像をとまなうものと否のもの）
- ・ 刻書 隸書 隸楷書（一部篆体を混う） 楷書
- ・ 字大 数cm～数m

ということになる。山東西部地域では石窟内壁や摩崖の壁面を丹念に磨
き上げて細字で長大な経文等を刻むものが見られない実態^{〔注3〕}があり、そうし
た刻経、仏名刻字等を概観すると、刻字を盛る素材の形状に碑、摩崖の別
はあるが、刻字は小から大へ、粗（寡）から密（多）へと移り、標幟、標
語としての語句や仏名から教義、思想を示す経文の録文までが口誦と視認
に至便な姿とされていることがわかる。

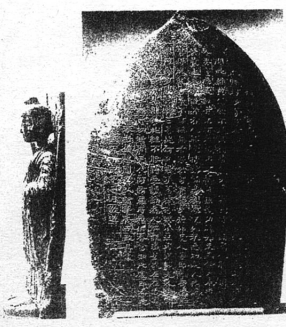
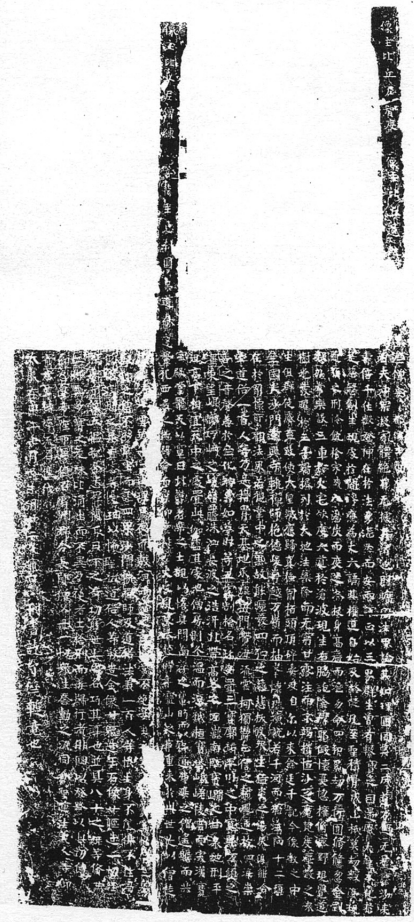
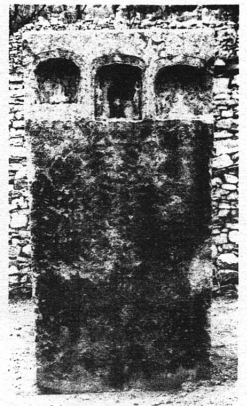
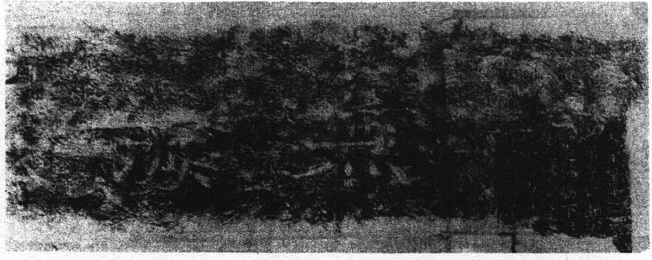
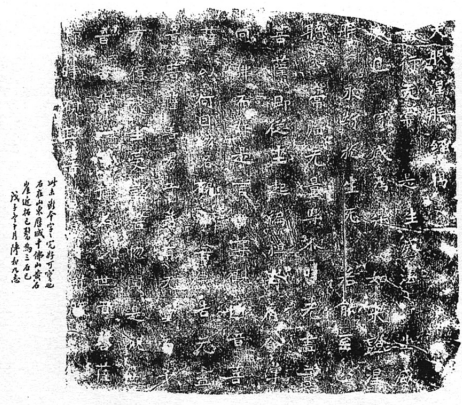
このさまは、堅固な露岩に文字を刻む中での、執拗なまでに碑形の造出
に拘り、その規模を拡大してゆくさま（洪頂山摩訶衍經碑、僧安道壹題名、

山东省重要碑刻及摩崖题刻分布图



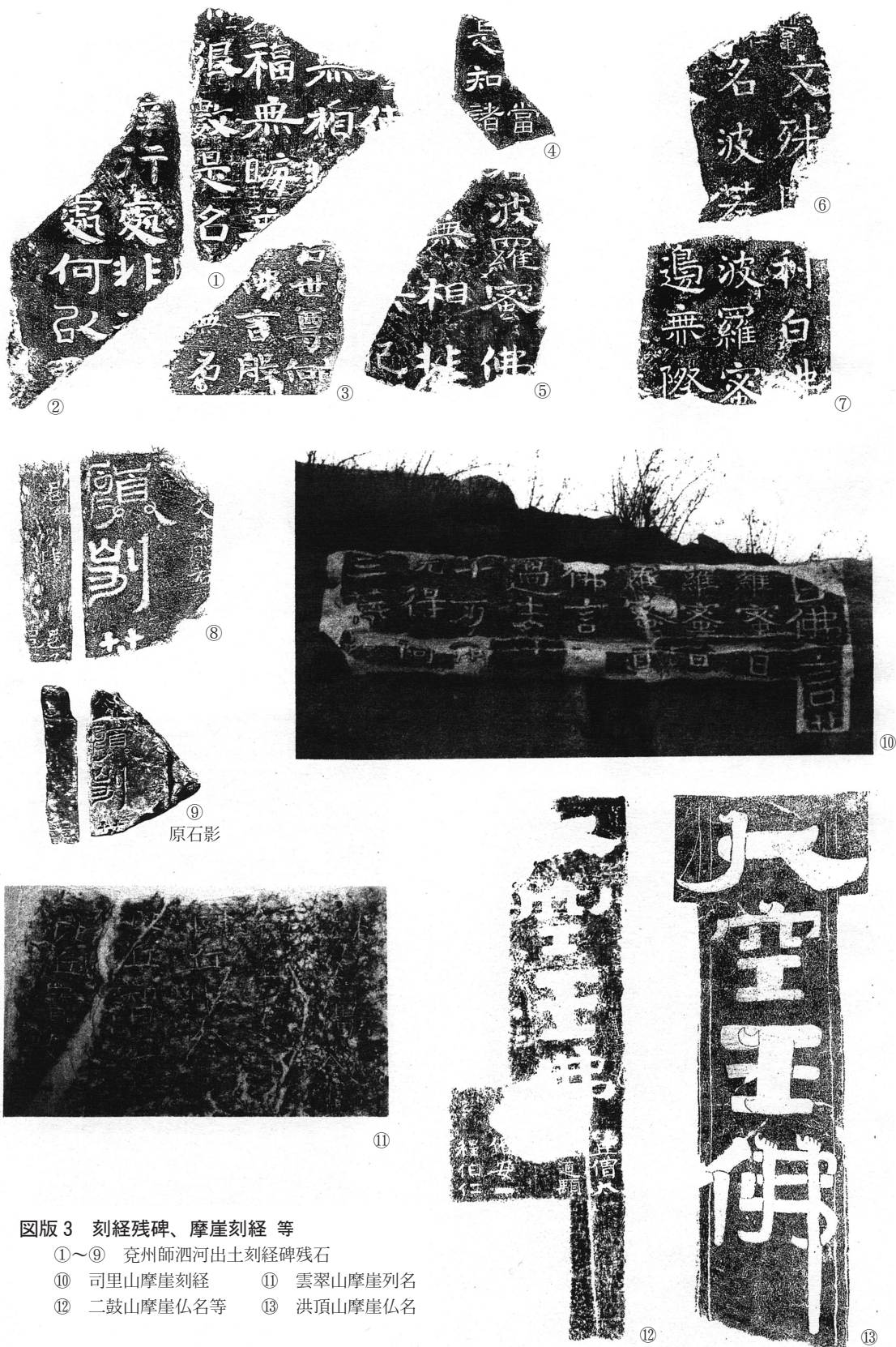
图版 1 山东西部佛教石刻（刻经等）所在地

（据 国家文物局主编『中国文物地图集』山东分册 上）



图版 2 造像题记、刻经碑 等

- ① 黄石崖刻经
- ② 司里山摩崖刻经
- ③ 兖州师泗河出土造像记断石
- ④ 东平海檀寺造像刻经碑
- ⑤ 泗水建兴寺造像碑
- ⑥ 曲阜胜果寺旧藏造像
- ⑦ 宁阳水牛山刻经碑

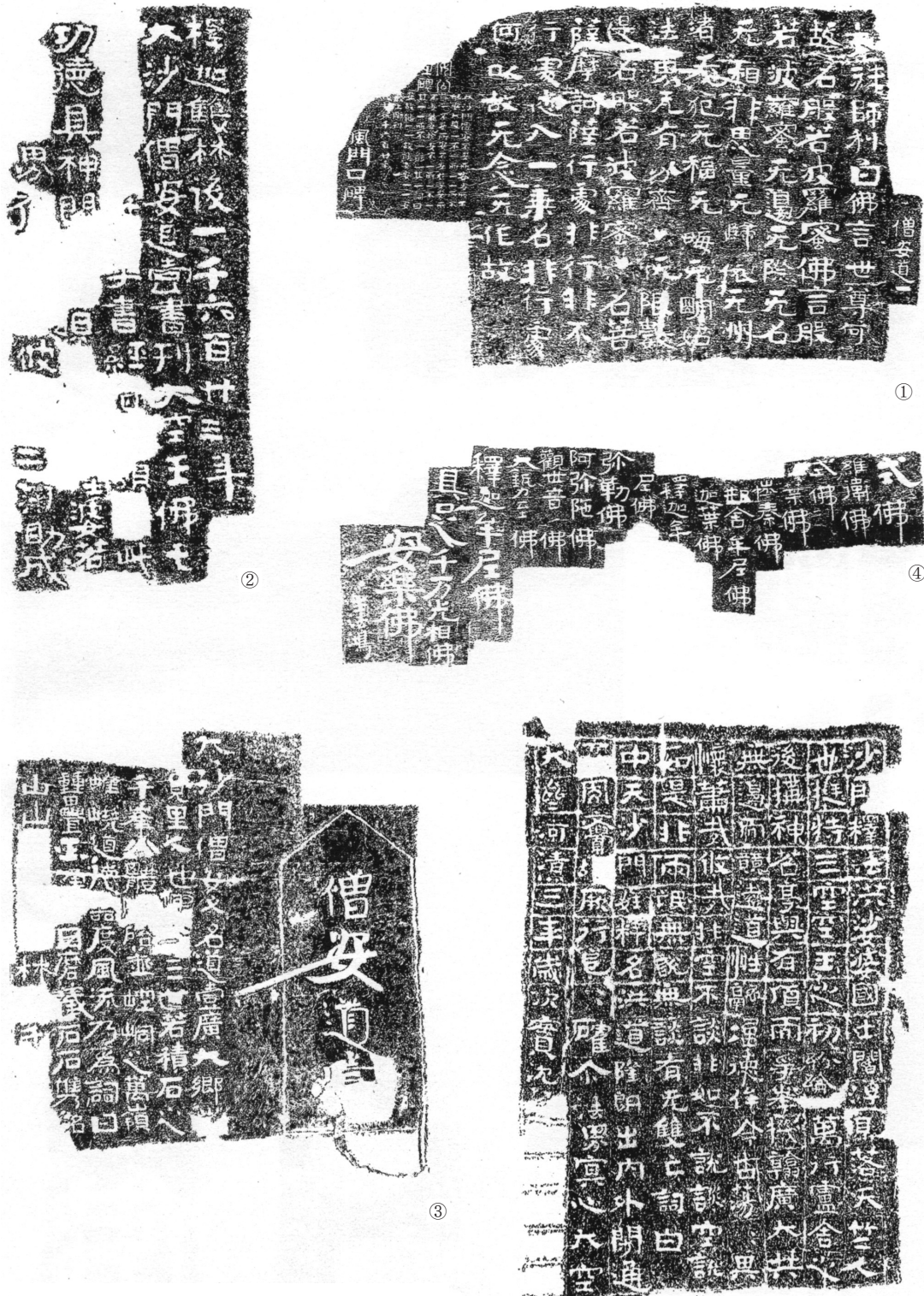


图版 3 刻经残碑、摩崖刻经等

①~⑨ 兖州师泗河出土刻经碑残石

⑩ 司里山摩崖刻经 ⑪ 云翠山摩崖列名

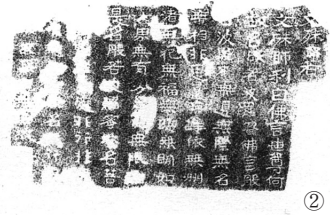
⑫ 二鼓山摩崖仏名等 ⑬ 洪頂山摩崖仏名



图版4 摩崖题记、刻经 仏名等
①~⑤ 洪頂山摩崖題記、刻經 等



①



②



③

大沙門僧安與漢人丞相京兆喜於十九世孫州主簿兼治中顯軍將軍滕
長史任州刺史與祖而子深 亦得息餘之兒兒等同刊經佛於昌邑 西歸道
漆山里于時天降東跡四轍地出涌泉一所故記大齊武平六年歲一木一月一日

文殊
般若

⑤

諸行
元常

⑦

大空正佛

⑥

昌邑王唐豈妃趙
同陳德成
西信 紀童

⑧

東嶺僧安道高僧經
竹易銷金石難滅託
高山不絕尋師誌
不二德悟一原匪直以
敢捐遺訓式章餘烈繼
大沙門安濟昌者道賢
城郡守主簿
任人郡主簿心都軍那
僧長營

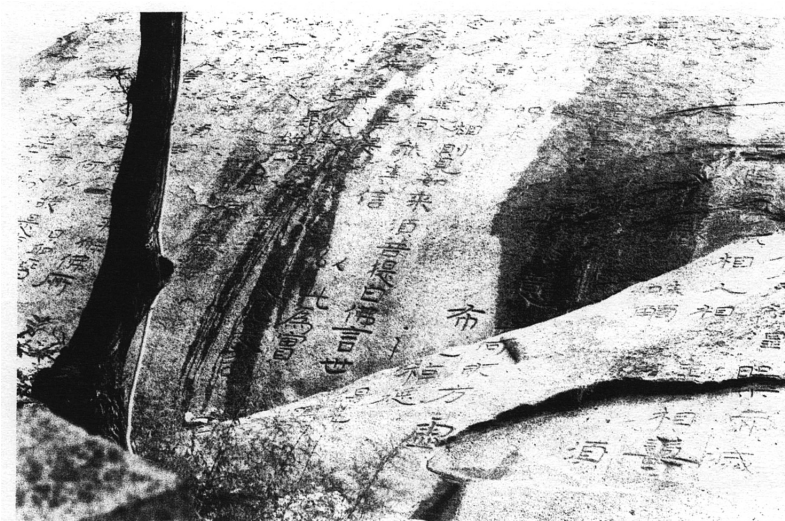
⑨

大沙門安濟昌者道賢
不二德悟一原匪直以
敢捐遺訓式章餘烈繼
竹易銷金石難滅託
高山不絕尋師誌

⑩

圖版 5 摩崖題記、刻經 等

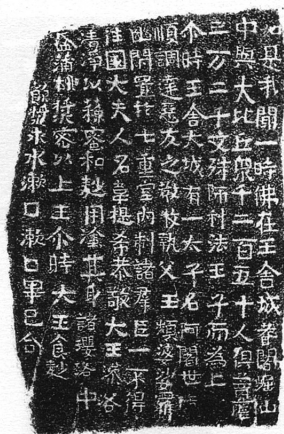
- ① 洪頂山南峰洞穴壁刻已
- ② 嶧山五華峰摩崖刻經
- ③ 嶧山妖精洞摩崖刻經
- ④~⑧ 尖山摩崖刻經題記
- ⑨ 鐵山摩崖刻經題記
- ⑩ 鐵山摩崖題記 (石頌)



①



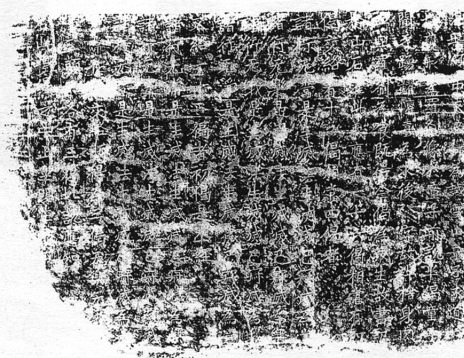
②



③



④



⑤

圖版 6 摩崖刻經、題記 等

- ① 泰山經石峪摩崖刻經
- ②~④ 崗山摩崖刻經題記
- ⑤ 寶山靈泉寺石窟題記

安公之碑、鉄山大集經碑、……↓(泰山金剛經刻石)を觀察させ、また、この元にごめく山東独自の刻字文化や、効験の靈妙さを表わす文字に託された道士らの伝統的書法(刻書中で用いられる篆体の文字)からの影響の痕跡を推測させることである。^{〔注5〕}

ところで、刻経、仏名等の刻成の由来を明確に表記したものは数が少ないが、例えば鉄山の「石頌」に、

「釋迦本演之世、□時十二那由他、衆生發菩提心、一万八千天子、得无生法。……

縱今鑄拘逢劫火、而莫燒神□、□□對炎風、而常住尔其丹青□。所以圖其

盛法。金石長存、□以□之不朽、此巖不緣、後葉何觀璋才。…… 敢緝遺訓、

式彰餘烈。縑竹易銷、金石難滅。託以高山、永留不絕。…… 樹標永劫。」^{〔図}

版5〕参照)

との記述があり、その末期には仏経の保全と先師の署経の永劫への伝存をはかる志願が確認される。この記述は、平齊の破仏に至る乱世の現実を身にする僧俗が「□林□千□□□□□□」^{〔図版4〕}「雙林後千六百二十三年」等と記す^{〔図版4〕}参照) 釈迦牟尼仏滅度後の年季を意識する末法到来への覚醒をもち、山林の靈気に触れながら、刻字、礼拝、口唱に託して、懺悔、解脱、滅罪、除障を導く信仰活動を進めていたことを証すようである。

「雙林後……年」との表記は、明らかに仏滅年を基準とした紀年である。本来「娑羅雙樹林に於ける釈迦牟尼仏の般涅槃の後……(年に当たる)年」とすべき表現が、「雙林涅槃後……年」と節略され、さらに「涅槃」の語をも省去して「雙林後……年」としたものと見られる。「雙林後」という当時の仏徒の作り上げた釈迦入滅年次を示す術語は彼らの異

様なまでの末法意識を如実に伝えるものと言うことができる。

「雙林後千六百二十年」との表記については、筆者および張総氏が個別に、さらに桐谷氏が、南嶽慧思の立誓願文、法顯の『佛國記』、費長房の『歷代三寶記』等の記事を用いて、慧思の基準に従えばとの仮定で、北齊天保四年(五五三)と比定できることを考証している。^{〔注6〕} 司里山刻経の年代をもってすれば僧安らの活動は天保年間より存在したように想像されるが、この紀年については、当時仏滅年代に関する多種の異説が存在していた事実があるのでさらに詳細に検討する必要がある。

因みに、僧安が活動していた当時、兗鄒の地では泗水建興寺に軌禪師が居り僧尼、衆人を集めて造像、一切経書写?などを行っているが、この禪師は当代を像法の世と考えていたことが造像碑の銘文から確認される^{〔表3〕}参考項^{〔注7〕}参照)。こうしたことからすれば僧安らの末法意識は当時としてはかなりの先進性をもつものと評することができ、このもとには鄴都仏教、殊に跋陀、僧稠系流の習禪者、乃至天竺僧法洪らを背景としたものがあるように想像される。

なお洪頂山北峯の題記に「僧安又名道壹、廣大鄉園里人也。」^{〔図版4〕}参照)とある僧安の出自、貫籍については、主要活動の範囲から東平と見てこの郷里名を実名と推測する向きもあるが、これを確認する資料は現在のところ発見されてはいない。この刻字は、現実の地名と見るよりも、僧安と関りのある中天竺人僧法洪(法鴻)の「娑婆國土閻浮聚落」といった刻記と同じく、名儀上のもの、仮託辞と見たほうがよいように思われる。次に内容等であるが、これらは、彫像を伴うものと刻字のみの場合があり、彫像は、釈迦 弥勒 観音 阿弥陀等の小像が見られる。仏経については、次表に表示することにしよう。

【表4】刻經の典拠と内容

抄刻經名	抄刻内容
大般涅槃經 (聖行品) 無常偈	諸行無常
小品般若波羅蜜經 (摩訶般若波羅蜜明呪品)	波羅蜜 (明呪) による十善道の成就
文殊師利所說摩訶般若波羅蜜經	智、觀仏
大集經 (穿 (海慧) 菩薩品)	調心、觀眞実、施、戒、忍、精進、三昧、智慧 (六波羅蜜)
佛說仁王般若波羅蜜經 (受持品)	般若波羅蜜
摩訶衍經 (小品般若波羅蜜經 (問乘品))	空
文殊師利所說般若波羅蜜經	般若波羅蜜、无念无作、一乘
小品般若波羅蜜經	空
思益梵天所問經	六波羅蜜
大集經 (穿 (海慧) 菩薩品)	六波羅蜜、発阿耨多羅三藐三菩提心、得无生法忍
維摩詰所說經 (見阿閼佛品)	正觀、无分別、一切言語道断
金剛般若波羅蜜經	受持讀誦此功德、罪業消滅、當得阿耨多羅三藐三菩提
佛說觀無量壽佛經	慈悲、八戒
入楞伽經 (請佛品)	无量自在三昧
金剛般若波羅蜜經	布施、書写、受持、讀誦、解説、功德
觀音經 (妙法蓮華經 (普門品))	自在之業、示現神通力、発阿耨多羅三藐三菩提。称名、得解脱、災厄、苦惱

さて、これらを見ると、諸法無常を説く『大般涅槃經』の無常偈、波羅蜜の十善道を説く『小品般若波羅蜜經』の抄刻からはじまる一連の山東西部の刻経が、具体的には、空觀の識取のもと六波羅蜜の奉行による彼我解脱とともに、慈悲心を深め戒行を進めつつ、経句の書写、受持、読誦、解説の功德をもって、衆庶の苦患と罪障の消除を導こうとするさまに展遷していったように觀察される。この一連の刻経の中で、末法下の仏經永伝の企図が濃密になることがあるが、その末時に、慈悲、八戒を説く『觀無量壽經』の一節や無量自在三昧を説く『入楞伽經』の部分が刻まれている。このことは十分に注意されてよいと思われる。

なお、刻経に際して選択、依用された漢訳仏經には、旧訳の姚秦龜茲國三藏鳩摩羅什訳の諸経とともに、北涼天竺三藏曇無讖訳の『大般涅槃經』、南朝梁代の扶南三藏の曼荼羅仙及び僧伽婆羅訳の『文殊師利所說般若波羅蜜經』が突出しており、当時最新の高齊那連提耶舎訳の『大集經』月藏分や心識をも説く元魏天竺三藏訳の『入楞伽經』が加えられる。このことも注目される。のちの時代、『文殊師利所說般若波羅蜜經』『入楞伽經』また『金剛般若波羅蜜經』は中国禪宗の依拠經典に、^{〔注9〕}『觀無量壽經』は浄土宗の根幹の經典として重んじられてゆくからである。

刻まれた仏名は法鴻の刻記が示すように、一連の「式佛」、すなわち法会に関わるものと想像され、後代僧靈裕が寶山靈泉寺大住窟壁上に刻んだ十六種の無常偈^{〔図版6〕}参照の如く、おそらく法式の折に念じ唱えられたものと見られる。僧信行の興した三階教の六時禮懺にも連なる唱礼を伴い修禪と結びついたものであったようにも思われる。

因みに、洪頂山遺跡の近接地、黄河を西渡した東阿の魚山の地に、陳思王曹植創始伝説をもった声明、唱名、梵唄が存在したとされ、^{〔注10〕}これが遙か

彼方の日本の地にも伝えられているとされるが、こうした梵唄は当時の法会、行道にも由来するものではなかったろうか。

なお上下9 m余に及ぶ「大空王佛」の仏名等が刻まれる洪頂山北峯南壁に谷を挟んで対峙する同南峯北壁には、「僧法洪題刻」を遺す地の東隣に北方に向かって開口した自然の洞穴（高約4 m×幅約4 m×奥行約7 m）があるが、この窟内の西壁上には多数の「卍」の古刻があり（**【図版5】**参照）ここがかつて仏事行道の場となっていたことがわかる。この洞穴は瘞窟である可能性もないわけではないが、おそらくは修禅の場とされていたのではあるまいか。洪頂山遺跡は刻経、念仏、唱名、修禅等を推考させるさまざまな資料、遺構を遺存させている。

ところで、泰山経石峪の大巖盤に大字で刻まれた『金剛般若波羅蜜經』は、菩提流支訳出のものでなく当時既に僧俗間に相当に流布、親炙していた鳩摩羅什訳のものである。このためこの刻経が『入楞伽經』を刻み残した僧衆とは異なった僧衆（先行する僧衆）の手になるものであることを推測させる。中国最大規模のこの刻経は、在地の有力者のみならず中央の官人などがかわったものと想像されるが、末尾所刻の経文、「以要言之、是經有不可思議不可稱量无边功德。……略……於後末世有受持讀誦此經、所得功德、……當知是經義不可思議、果報亦不可思議。」との刻字と共に、全刻字を総覧すると、この刻経が経句の書写、受持、誦誦、解説の功德による罪業消滅、無上の智（阿耨多羅三藐三菩提、無上正等正覚）の獲得を期しての活動の賜物であることがわかる。こうした山東流の刻経行為は、北齊末北周初の王朝の立替という戦乱を伴う政治変動を経て、経句に拠り所を措かず、専一の実踐行を最大限に尖鋭化させていく仏教の流れの中で変質し、廃退していったように想像される。

II 北齊後期の沙門大統と山東・鄴都の仏教石刻

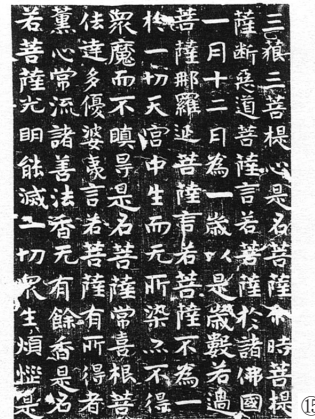
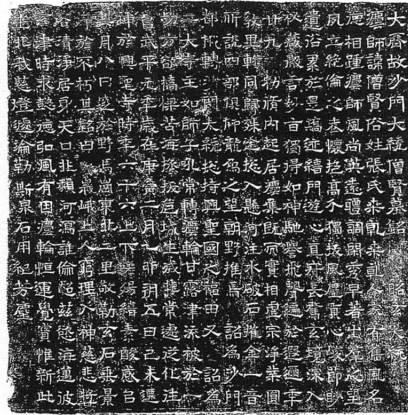
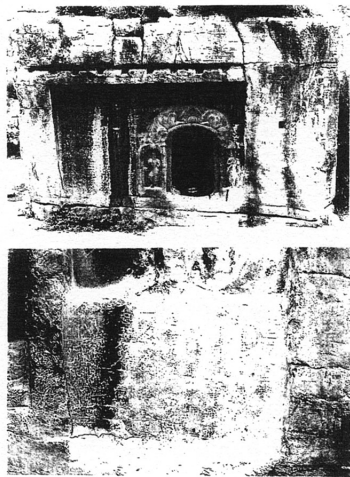
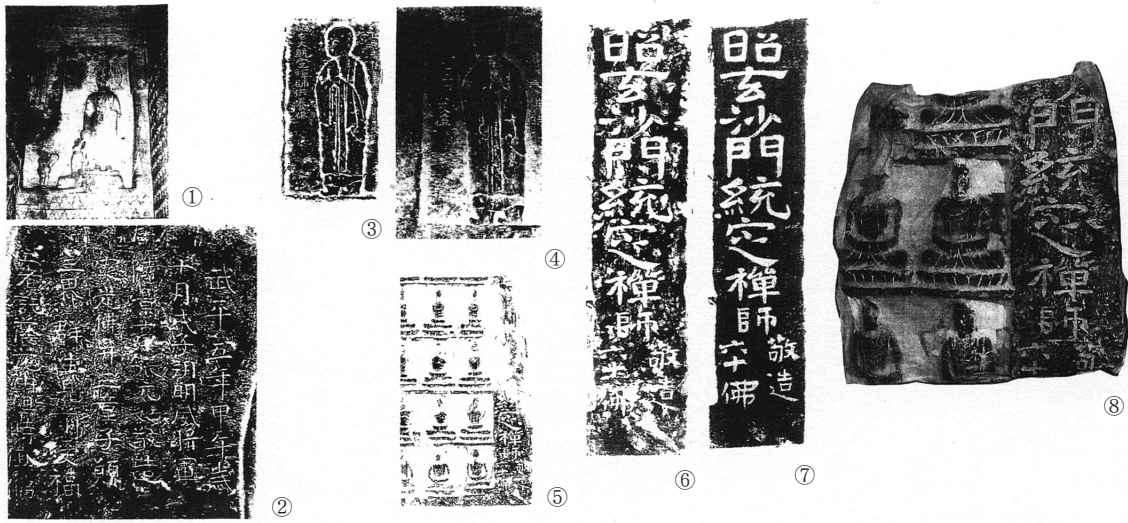
一 僧安らの刻経活動と定禪師

河清、天統、武平を中心とした年代には山東の濟、兗、鄒等の地では僧安らの刻経活動が見られ、またこれに関わる活動の痕跡が鄴西北の鼓山、滏山、中皇山中の石窟にも遺されている。それらのうち、紀年のより明確なものを年代順に配列すれば次記のようになる。

・山東	兗州泗河出土	造像記断石	河清三年（實際の刻は天統元年か）
	鄒城嶧山五華峯		河清三年
	新泰徂徠山	光化寺跡	武平元年
	同	英仏巖	武平元年
	鄒城尖山		武平五年
	同		武平六年
・鄴西北	北響堂山	唐邕刻經	他
	（鼓山）		天統四年〜武平三年
	南響堂山	文殊般若經	他
	（滏山）		武平初年（五年前後）
	中皇山	思益梵天所問經	他
			武平年間（注1）
			（承光以前）

（**【図版2】**）〜（**【図版7】**参照）

因みに、当時南響堂山（滏山）石窟第二洞中心柱北壁上には昭玄沙門定禪師が六十佛を彫り供養し題記を刻んでいる。この定禪師は鼓山水浴



图版7 定禪師、僧賢闕連刻字等

- ①② 水浴寺石窟西窟定光佛三童子像、題記 ③④ 定禪師供養佛彫像
 ⑤~⑧ 南響堂山石窟第2洞定禪師題記 ⑨⑩ 善應小南海全景
 ⑪ 僧賢墓銘拓影 ⑫ 北響堂山山中 大般涅槃經刻經(紀年部分)
 ⑬ 北響堂山石窟南洞唐邕刻經記 ⑭ 南響堂山石窟第2洞內壁刻經
 ⑮ 中皇山梳粧樓背石壁刻經

寺石窟西窟の供養僧像、及び定光佛三童子像の題記から武平五年（五七四）時点で沙門大統となっていたことが判明する（【図版7】参照）。山東西部で刻経活動を行った僧安らは何らかの由縁でこの定禪師らとの接点を有していたようである。この定禪師については、僧伝、史書等に記述を欠いているが、道房の師弟「定」である可能性があるようにも推考される。^{〔注12〕}

ところで、こうした年代には、山東兗州の治府（瑕丘）に儒、仏、道を崇信する下記のような貴顕が刺史として赴任している。

斛律平、段琛、畢義雲、高元海、鄭述祖、斛律武都 等

このうち高元海は、渤海脩縣出自の高歡の従子である上洛王高思宗（武定末兗州刺史）の子で、武成帝の寵臣和士開の譖で河清二年（五六三）正月斥けられ兗州刺史に左遷され、のち天統初年に入朝、祖珽らとともに朝政の枢機に与った人物である。史書の文によれば、崇仏家の元海は、帝王の崇仏行動に深く関わっていることがわかる。

「子元海、累遷散騎常侍。願處山林、修行釋典。文宣許之。乃入林慮山、經二年、絕棄人事、志不能固、啓求歸。征復本任、便縱酒肆情、廣納姬侍。又除領軍、器小志大、頗以智謀自許。」^{〔注13〕}『北齊書』卷十四、『北史』卷五十一

「性寛和、頗有武幹」と評記されたその父と比べるとかなりの俗情をもった人物とみえる。ただし自ら願って出家し、林慮山中で修行して還俗している経歴がある。元海は同じく兗州刺史となっている畢義雲の伝中にも、

「孝昭赴晉陽、高元海留鄴、義雲深相依附。知其信向釋氏、常隨之聽講、爲此款密、無所不至。」^{〔注14〕}『北齊書』卷四十七、『北史』卷二十九

と見え、また、『續高僧傳』卷第八「義解四」「齊洛州沙門曇衍傳」等にも

法師に帰依したことが記されており、当時の政界、僧界を知る上では最重要な人物であり、この高元海と山東との関わりが注意されるのである。^{〔注15〕}

なお畢義雲については在任地で豪族羊氏と兗州大中正を争った記事が『北齊書』卷四十三「列傳第三十五」「羊烈傳」に見られる。^{〔注16〕}

二 新出土の「昭玄沙門大統僧賢墓銘」

二〇〇六年初冬、北齊中後期の仏教界の動向、殊に昭玄曹を統括し全国の僧尼を綱領する沙門大統位に就いた僧侶の実態を明かす青石の刻字資料が出土した。この墓銘の概要は次記の通りである。^{〔注17〕}【図版7】参照。

出土地 鄴西 野馬崗の墓域（現 安陽市北西）

形状 有蓋（覆斗形方角、帶鉄鑽²）無題額、身上界格を刻す

寸法 縦46.3 cm×横46.0 cm×厚9 cm

刻字 方2.5 cm、行19字詰19行、総349字

(1) 僧賢に関する既知の記事

ところで、この墓銘に記された僧賢なる僧に関しては、僧伝、刻書にそれぞれわずか一種ずつの記事が遺されている。先ず『續高僧傳』卷第二十五「習禪六」「衛州霖落泉釋僧倫傳 十一」の文を引こう。

「……齊武平九年、與父至雲門寺僧賢統師、珉禪師所、受法出家。時年九歲。二師問其相狀、答以白光流臉二幡夾之。歎曰、子真可度。因而剃落。周武平齊、時年十六、與賢統等流離西東、學四念處誦法華經。……」

これによれば、僧賢は武平九年の時に雲門寺の統師となって、僧倫を得度させ、周の平齊の時に倫と共に西東に流離したということになる。道宣は、『續高僧傳』卷第十六「習禪初」の釋僧稠禪師傳末に、

「余以貞觀初年陟茲勝地。山林乃舊情事惟新、觸處荒涼、屢興生滅之歎。周
睨焚燼、頻噓黍離之非。傳者親閱行圖、故直叙之于後耳。」

と記している。この伝はおそらく道宣が親しく四伝の祖僧稠禪師の故地を
訪れ、かつての雲門寺の旧跡などを尋ねて関連の情報などを得た上で綴っ
たものなのであろうが、仏教史学者の諏訪義純氏がその著で年次の記述に
全幅の信頼をおき難いことを述べている。^{〔注18〕}王朝の変遷を経た七十余年も前
の出来事がどのように伝えられるのか、こうした記事は混乱を排除して注
意深く読む必要がある。

次に僧賢に関わる記事は意外なところに残されている。稠禪師が禅観の
実修を行なった龍山雲門寺の石窟の外壁の書刻で、安陽善應小南海所在の
石窟の左に彫り出された守門の金剛神像の坐下に次の刻字が見えるのであ
る【図版7】参照。

比丘僧賢供養

雲門寺 僧織書

因波將軍彭惠通刊

□^如来證涅槃 永斷於生死

囹能至心聽 當得无量樂

一切畏刀杖 无不愛壽命

恕己可爲喻 勿煞勿行杖

書刻の偈句は北涼天竺三藏曇無讖譯の『大般涅槃經』卷第二十二「光明
遍照高貴德王菩薩品」第十、及び同經卷第十「一切大衆所問品」第五中に
所説のものであり、こうした偈句は、稠禪師日常の口説で、それを継承す

る僧賢らの標語とも推測され、窟前壁に刻成された稠禪師の禅観の要諦を
示す『大方廣佛華嚴經』の偈讚、『大般涅槃經』「聖行品」、及び「梵行品」
の偈讚等と即応する内容をもっている。僧賢の名はこのようなところに辛
うじて残されているのである。

(2) 僧賢の閼歴と遷化

ここで歴史の流れに埋没しかけた僧賢の人物像を、新出の墓銘の文を釈
読、試訓しながら省察してみることとする。

釋文

大齊故沙門大統僧賢墓銘 昭玄大統

灑師諱僧賢俗姓張氏棄乾棄乾人家有舊風名
德相踵灑師風尚英遠體調閑秀早著出羣之望
夙立絶倫之表懷抱高分獨拔風塵貞心峻蔚眇
遺俗累於是矯迹緇門遊心真寂長驚玄境深入
秘藏微言妙旨獨得如神馳譽飛聲遍於遐邇季
廿九 敕脩内起居灑集既而實相虛宗淨業圓
教異軫同歸殊途捨入懸河注水破石摧金一音
所説四部俱仰龍象之望朝野推焉 詔爲沙門
都俄轉沙門大統捨持興聖國之福田又 詔爲
二大寺主如師子吼常轉灑輪甘露津流被於一
切方欲橋樑苦海拯拔危城生滅非常遽從化往
日武平元季歲在庚寅二月乙卯朔五日己未遷
神於興聖寺時季六十六上下嗟殤緇素酸感曰
其月八日窆於野馬崗東北二里敬勒玄石垂景

行於不朽其銘曰 峩峨上人窮理入神慈悲辨
俗清淨居身天口非類河瀉誰倫超慾海邁彼
玄津時求懿德弘風有因灑輪恒運覺寶惟新此
生非我慈燈邊淪勒斯泉石用紀芳塵

私訓

大齊故沙門大統 僧賢 墓銘 昭玄大統

法師 諱は僧賢、俗姓は張氏、桑乾の桑乾人なり。家は舊風有りて名
徳相ひ踵ぐ。法師 風尚 英遠、體調 閑秀にして、早に出群の望を著し、
夙に絶倫の表を立つ。懷抱 高分、獨り風塵を抜く。貞心 峻節 眇に
俗累を遺つ。是に於ひて 迹を緇門に矯め、心を真寂に遊ばす。長に玄境に
驚せ、

深く秘藏に入る。微言 妙旨 獨り神の如きを得、譽を馳せ 聲を飛ばせ
遐邇に遍し。季 廿九、内起居 法集を敕脩す。既にして 實相 虚宗、淨業
圓教、

異軫にして同歸し 殊途にして捨入す。懸河 注水、破石 摧金、一音の
所説 四部 俱に仰ぐ。龍象の望 朝野 焉を推せり。詔ありて沙門都と爲り、
俄にして沙門大統に轉ず。捨持 興聖は 國の福田、又 詔ありて二大寺主と
爲る。

師子吼の如く、常に法輪を轉ず。甘露 津流し、一切に被ぶ。方に苦海に橋
樑し、

危城を拯拔せんと欲するに、生滅は非常にして、遽に化往に従ひ、
武平元季歳在庚寅二月乙卯朔五日己未を以ちて 神を興聖寺に遷す。
時に季 六十六なり。上下 嗟殤し、緇素酸感す。其の月八日を以ちて

野馬崗の東北二里に窆り、敬みて玄石に勒し、景行を不朽に垂る。
其の銘に曰はく、

峩峨たり 上人、窮理 神に入る。慈悲 俗に契にして、清靜 身に居む。
天口は非類、河瀉 誰れか倫せむ。茲に慾海を超え、彼の玄津に邁く。

時に懿德を求め、風を弘むるに因有り。法輪 恒に運らせ、覺寶 惟れ新たな
り。

此の生 非我にして 慈燈 遽かに淪ゆ。斯の泉石に勒して、用ちて芳塵を紀
せり。

この墓銘から僧賢の俗姓が張であり、その出自が山西の桑乾郡桑乾里で
あったことがわかる。「家は舊風有りて 名徳 相ひ踵ぐ。」とあるので、そ
の家からは多くの人材が現われていたのである。

ところで、銘文には出家の年が記されていない、このため法臘も不明とな
るが、僧賢は年若く緇門に入り、その英邁な性を發揮したもののようであ
る。年廿九で内起居法集を敕脩している僧賢は内外の典籍に通暁して皇上
の信を得ていたものと見られる。なお、師承についても銘文中には記述が
ないのでどのような経緯を経て一代の沙門となったかを正確に明かすこと
ができない。しかし、沙門都について沙門大統に転じて、王朝の官大寺の
捨持、興聖の二大寺主となって法輪を転じている僧賢には大いなる師承が
あったように推測される。小南海石窟の刻字資料から見て僧賢は僧稠の直
弟子の一人と見て誤りはないと思われる。僧賢は師僧稠なき後の北齊代の
中後期に至って鄴都仏教界の雄となり老いて退隱しようとする法上にかわ
って、僧尼を綱領する沙門大統の地位に就いたのではなかったろうか。
こうした僧賢は惜しいことに沙門大統二大寺主となって久しく時を経ず

武平元年（五七〇）二月朔五日に任任の興聖寺で六十六歳で遷化し、同月八日で野馬嶺東北二里の墓所に遷^{〔注20〕}られている。遷化の年からすれば、その生まれは北魏宣武帝正始二年（五〇五）、師僧稠（北魏孝文帝太和四年（四八〇）生、北齊廢帝高殷乾明元年（五六〇）四月遷化）とは二十五歳の差があったことがわかる。

なお、墓銘中の「捨持寺」は、大総持寺と称された河清二年（五六三）五月、武帝建立の官大寺（「五月壬午詔、以城南南雙堂寺閨位之苑造大総持寺。」〔北齊書〕卷七 武成紀）で、「大興聖寺」は、河清二年（五六三）八月、武帝帝が曹魏時に築成された銅爵、金獸、氷井の三臺を修改した金鳳、聖應、崇光の三高臺宮をすべて施入して創立した壮大な官大寺（「秋八月辛丑詔、以二臺宮爲大興聖寺」〔北齊書〕卷七 武成紀）である。

三 僧賢・定禪師と唐邕・僧安ら

ここで、北齊の天統、武平年間に活動の時を持っていた僧賢、定禪師、唐邕・僧安らを再確認したい。

先ず、天統元年（五六五）とされる滏山（南響堂山）石窟の開鑿後、その第二窟の修宮を行なったのが定禪師である。この時僧賢は沙門大統の僧官に就いていたと見られる。僧賢の遷化が武平元年（五七〇）二月であり、この後に沙門統であった定禪師が沙門大統位に昇叙されている。この昇叙が僧賢の遷化の直後であったとすれば、滏山（南響堂山）石窟第二窟の題記はそれ以前の刻成となる（定禪師の沙門大統位昇叙が武平五年乃至その前年であったとすればこの題記はそれ以前の刻、武平二〜四年の間となる）。こうした時に山東の僧安らは訪艸したようであり、その時期の刻書がこの第二窟等に残されている。^{〔注21〕}僧安らの訪艸が一度のみであったのか数度あったのか

不明でさらにその訪艸が僧賢の遷化前であるのか後であるのかも現在確認はできないが、この天統、武平年間に主とする時代に艸都の仏教と山東の仏徒が濃密な係わりを持っていたことが知られるのである。

また、鼓山（北響堂山）石窟南窟の唐邕が主催した刻経は、天統四年（五六八）三月から武平三年（五七二）五月の間に刻成されている。この刻経事業が進められてゆく折、僧賢は艸都仏教界の統括者となっていた。^{〔注22〕}僧賢の先師稠禪師は帝室の寺、石窟大寺の寺主であった。石窟大寺の一角に独自の刻経を行なう唐邕が帝室及び僧界の支持をうけなかったとは考えにくい。おそらく唐邕の刻経には、当時の昭玄沙門大統僧賢が深く関わっていたものと推測される。僧安らはこの刻経事業の終末時に際会していたものと思われる。

なお北響堂山山中の柏樹下には『大般涅槃經』の刻経が遺存している。このものは現在断裂、剥落が進み関心を持つ人が少ないが、隸書刻成で天統二年（五六六）の紀年をもつ極めて重要な刻経資料である。^{〔注23〕}山の半腰の露岩に鑿られた数箇所の禅窟とともに造立されたと思われるこの刻経は、僧稠ゆかりの沙門大統僧賢（或はその門流）の手にかかわるものと推測される^{〔注24〕}ところがある。

ところで僧賢の墓銘中の「一音所説、（四部俱仰）」の句は鼓山（北響堂山）南洞の「唐邕寫經記」中に見られる「一音所説（盡勸名山）」の句に表現が酷似している。こうしたことは偶然の場合もあろうが、同時代の同時期の限られた人々の手になる記銘の中に現われた両句は注目に値する。「唐邕寫經記」の刻書自体は、滏山（南響堂山）石窟の『文殊師利所説般若波羅蜜經』や『摩訶般若波羅蜜經』の刻書と書態を同じくするところがあり、僧安らの影を漂わせている。では天統四年（五六八）三月一日に起こされ

武平三年（五七三）五月八日に畢わったと記される「寫經記」の銘文自体は如何であろうか。唐邕が鼓山に刻經事業を起こした天統四年（五六八）は、沙門大統となった僧賢が獅子吼、奮迅し僧衆を綱領していた時である。この僧賢は曾て鼓山の石窟大寺主となった僧稠ゆかりの沙門である。先師の領した鼓山の山内で行なわれつつある刻經事業に沙門大統僧賢は大いに関わりをもったように思われる。僧賢の墓銘の句と契合する寫經記の句は唐邕と僧賢の密接な結びつきを想像させるのである。

山東西部の刻經はこの時期以後、より長大なものとなり、巨大化の頂点



図版 8 宇智川仏經摩崖刻書（日本 奈良県五条市）

① 原石影 ② 拓影

を過ぎる北周の大象初年を堺にその姿を忽然と消していく。政情、民生の変容、主導者、支援者の遷変とともに、中国仏教が經文、經句、文字の限界を見据えてその枠を破却し身行そのものを重んじてゆく流れの中で、山東流の刻經は廃れていったと見てよいようである。

なお因みに記すと、仏經抄句、節文を石材に刻む流れは、東アジアの東端の島嶼国日本にも遙かに及ぶことがあり、奈良時代末には、『大般涅槃經』の無常偈を抄刻する摩崖刻書を出現させている^{〔注24〕}（【図版8】参照）。このものは古代日本唯一の遺品であり、羅刹から聞取した真諦を岩上に刻記したとされる雪山童子の話柄にあやかる所為から起こされたもので、直接的に山東の刻經との係わりをもつものではないが、無常の世を意識する信徒の遺品として、その信仰、思想の根幹を類同するところがあるように観察される。

むすびに

以上、山東西部の仏經石刻营造の流れが、少数の門侶とその支援者から始められて次第に拡大し、在地の豪族と衆人を結んだ大規模な事業へと展開していったさまを概観した。

地方の有力者や府所に赴任した中央官人との関わりからもたらされた王朝の貴顕、僧界との繋がりに併せて、変乱と狂気、災厄に満ちる世の蠢きの下に、末法到来に思いを馳せる意識がこうした刻書を生んでいったようであるが、自己解脱とともに女性を含めた世の人々の安樂世界への導き、苦患、罪過の滅除を果たそうとする縉素の切実な願いがこれらの石刻の中には深々と湛えられている。

こうした石刻は、視認、礼拝、口誦する対象として標示されたもので、

波羅蜜の奉行、仏名の礼讃、罪業の懺悔を含めた禅観の行法に係わるものであり、鄴都の仏教、殊に僧稠の門流とのかかわりの中にその姿を変えていくところがあったようである。

山東西部の刻経は、王朝の交替と主導者の遷化、仏教思想の変容とともに後の時代に形を同じくして受け継がれることはなかった。しかしこうした刻経を生み出した思想、信仰のもとから、含靈救済の実践を念仏、修禅、奉仕等の一行に帰結させる中国大乘仏教の諸宗が現われ出していることは注目に値する。山東西部の仏教石刻はこの遙かなる道程を明かす極めて貴重な遺品とも言える。

【参考】関連事項略年表

年月	記事
永熙三年(五三四)一〇月二九日	元善見(孝静帝)鄴へ遷都。こののち慧光 國統(沙門大統)となる。
天平三年(五三六)	高澄 入朝、輔政。
天平四年(五三七)	慧光 没。弟子法上 沙門都統(大統)となる。
元象元年(五三八)秋	鄴都仏寺建立の禁 発詔。
元象元年(五三八)冬	天下仏寺建立の禁 発詔。
武定五年(五四七)正月	高歡 没。
武定七年(五四九)八月	高澄 殺害さる。
武定八年(五五〇)正月	高洋 即位(文宣帝)、天保と改元。
天保元年(五五〇)	この頃 帝 僧達のために洪谷寺を立て定寇寺を造る。
天保二年(五五一)	靈山寺方法師等 小南海石窟造営を始む。
天保三年(五五二)	帝 僧稠を鄴都に迎う。
天保六年(五五五)	國に十統(大統、通統)を置く。僧稠 雲門寺、石窟大寺主となる。諸國に禅肆を造る。
	帝 建国寺を建立。
	國師大徳稠禪師 小南海石窟重修。

天保七年(五五六)五月	帝 断酒禁肉。
天保八年(五五七)七月	帝 鷹鶴禁絶。
天保八年(五五七)八月	帝 宗廟不血食の詔を発す。
天保九年(五五八)一二月	この頃 高元海 朝政に関与。
天保十年(五五九)一〇月	帝 大莊嚴寺建立。
乾明元年(五六〇)二月	文宣帝 没。高殷(廢帝)即位。
乾明元年(五六〇)四月	この頃までに司里山刻経刻成?
乾明元年(五六〇)八月	高湛 斛律金らと謀り楊愔らを殺害。
乾明元年(五六〇)八月	僧稠 雲門寺に於いて遷化。帝 弔問。
乾明元年(五六〇)八月	僧稠遺弟等 小南海石窟壁面に鏤石班經。
乾明元年(五六〇)八月	廢帝 退位、高演(孝昭帝)即位、皇建と改元。
皇建二年(五六二)五月	僧稠弟子曇詢 造塔建碑。
皇建二年(五六二)九月	孝昭帝 出獵時落馬し死去。
皇建二年(五六二)十一月	高湛(武成帝)即位、大寧と改元。
皇建二年(五六二)十一月	この頃 高元海 執政。
河清二年(五六三)正月	高元海 和士開により失脚、のち兗州刺史に左遷、和士開 胡太后に通ず。
河清二年(五六三)五月	帝 大総持寺造立。
河清二年(五六三)八月	帝 三台宮を捨て大興聖寺を造営。
河清二年(五六三)八月	武成帝 帝位を子高緯に禅譲、高緯(後主)即位
河清四年(五六五)四月	天統と改元。
	この頃より鼓山(南響堂山)石窟開鑿。
	この頃 僧賢 沙門大統に任ず。定禪師 沙門統に在任?
	唐邕 鼓山(北響堂山)石窟に刻経を開始。
	太上皇帝(武成帝) 死去。
	後主 金鳳等未入寺のものを興聖寺に施入。
	趙郡王高叡ら胡太后に和士開の退出を求む。高叡 殺害される。
	この頃 高阿那肱 并省尚書令在任? 高元海 宮中に戻る。
	沙門大統僧賢 遷化。
	この頃(或はこれ以前?) 僧安ら来鄴?
武平元年(五七〇)二月	

武平二年(五七二) 七月	琅邪王高儼 胡太后妹夫馮子琮と謀り和士開を断罪、殺害。 この頃 胡太后 沙門曇獻と通ず。曇獻を昭玄統となす。
武平二年(五七二) 十月	後主 胡太后を北宮に幽閉。 陸令萱、祖珽 執政(令萱の姪を妻とする高元海も朝政に与る) このうち祖珽、高元海を鄭州に転出。 この頃 慧順、曇衍らを国都とする。
武平三年(五七二) 五月二 八日	唐邕 刻経畢功。
武平三年(五七二) 六月	解德光 祖珽の讒で殺害さる。
武平四年(五七三) 五月	祖珽失脚、陸令萱ら権力をもつ。
武平五年(五七四)	この頃 水浴寺石窟西窟造営。定禪師 沙門大統に在任。
武平十六年(五七五) 七月	北周武帝 北齊討伐の詔を下す。
九月	高阿那肱 北周軍を退く。
承光元年(五七七) 正月	唐邕 北周に降る。
承光元年(五七七) 正月二 〇日	北周軍により鄴都陥落。
建德六年(五七七) 正月二 七日	北周武帝(宇文邕) 廢仏。一切の仏寺、經典を毀破、釈子を還俗、編戸。
宣政元年(五七八) 六月	北周宣帝(宇文贇) 即位、大成と改元。
大象元年(五七九) 六月	北周宣帝 子宇文衍(静帝)に讓位、天元皇帝となる。大象と改元。仏教信奉を允許。
大象二年(五八〇) 五月	北周天元皇帝 死去。天元大皇の岳父、楊堅 実権を掌握。
大象二年(五八〇) 六月	北周静帝 仏道二教を復興。
七月	尉遲迥 自立し反朝。
八月	崗山刻経刻成。
大定元年(五八一) 二月	韋孝寛 尉遲迥を鄴城に破る。迥 自殺。相州を安陽に移し鄴城、邑居を毀廢。 楊堅 北周を廢し、隋を建国、開皇と改元。

注記

1、実査及び次記先学の論著に拠る。

- ① 頼非「僧安刻経考述」(『北朝摩崖刻経研究(続)』(香港天馬図書有限公司二〇〇三・二一九二〜一三四頁))
- ② 頼非『山東北朝佛教摩崖刻経調査与研究』(科学出版社 二〇〇七・一二)
- ③ 頼非「秦嶺山区刻経新資料の相關問題」(第54回 國際東方學者會議 発表レジュメ 二〇〇九・五・十五)
- ④ 樊英民「北齊沙丘城造像殘碑考釈」(『李白在兗州』山東友誼出版社 一九九五年二月 七一〜七五頁)
- ⑤ 徐葉翎、樊英民「記兗州近年發現的《北齊河清三年造像記》」(『書法』一九九六第三期 表紙 四一頁、八頁、図版 二三〜四〇頁、他)
- ⑥ 馬忠理、張沅等「涉県中皇山北齊摩崖刻経調査」(『文物』一九九五年5期 六六〜七六頁)
- ⑦ 馬忠理「邯鄲鼓山、滏山石窟北朝佛教刻経」(『北朝摩崖刻経研究(続)』香港天馬図書有限公司 二〇〇三・一二 一七七〜二〇六頁)
- ⑧ 馬忠理「邯鄲北朝摩崖佛経時代考」(『北朝摩崖刻経研究(二)』内蒙古人民出版社 二〇〇六・七 一五〜七三頁)
- ⑨ 張総「北朝至隋山東佛教藝術查研新得」(『漢唐之間的宗教藝術與考古』文物出版社 二〇〇〇・六 六一〜八八頁)
- ⑩ 張総「山東摩崖刻経經義的涵索探」(『北朝摩崖刻経研究(続)』香港天馬図書有限公司 二〇〇三・一二 一〜四四頁)
- ⑪ 桐谷征一「北朝摩崖刻経と經文の簡約化―選択から結要へ―」(『大崎学報』157号 二〇〇一・三 一二五〜一八九頁)
- ⑫ 桐谷征一「北朝摩崖刻経の成立とダルマの壁觀」(『田賀龍彦博士古希記念論集 仏教思想仏教史論集』山喜房佛書林 二〇〇一・三 一二五〜一五五頁)
- ⑬ 桐谷征一「北齊大沙門安道壹刻経事迹」(『北朝摩崖刻経研究(続)』香港天

馬図書有限公司 二〇〇三・一二 四五〜九一頁)

⑭ 大内文雄「中国における石刻經典の発生と展開」(『仏教の歴史的・地域的展開―佛敎史學會五十周年記念論文集―』法藏館 二〇〇三・一二 五八〜八九頁)

⑮ 大内文雄「北齊仏教の一面―衰亡と再生―」(『相川鐵崖古稀記念書学論文集』木耳社 二〇〇七・一〇 七七〜八四頁)

⑯ 田熊信之「山東平陰東平縣発見の北朝仏経摩崖について」(『昭和女子大学文化史研究』第3号 一九九九・六 一七〜二一頁)

⑰ 田熊信之「北朝摩崖刻経与安道一」(『北朝摩崖刻経研究(続)』香港天馬圖書有限公司 二〇〇三・一二 二五〜二七六頁)

2、田熊信之「兗州泗河出土の造像銘断石、刻経残碑と北齊後期の沙門大統」(二〇〇九・一 科学研究費研究成果報告会レジュメ)等 参照。

3、注1所掲の諸氏論著 参照。河北邯鄲西北所在の鼓山(北響堂山石窟、摩崖)及び滏山(南響堂山石窟、摩崖)、涉県中皇山(中皇山石窟、摩崖)には、選出された長文の仏経を鐫刻する刻字が遺存するが、これと等質の違例は山東地方の諸地には見られない。

4、山東地方には秦始皇帝造立の六刻石以来、立石、造碑、刻字の遺品が多数確認され、こうした地方の文化的な背景も視座に加える必要がある。張総氏もこれに言及している。注1所掲⑩論著二八頁 参照。

5、道教の徒の手になる篆体の書字の遺品は、後漢代以来のものがあり、呪禱従う書法の一面がこうしたものの基幹に関わることが観察される。当時の仏教徒の一部もこのような文字表現を受け受したこともあったのではあるまいか。なお、道徒の符字書写の記述中に次のようなものが頻見される。

「玉精訣言、常以戊巳之日、刻白石以黃書九天玉文、埋所住嶽西方。臨埋時、西向叩齒九通呪曰、……」(『洞眞太上三九素語玉精眞訣』「帝君玉文全眞神上法」上『道藏』第33册 文物出版社等 一九九四・八 五〇〇〜五〇一頁)

(ほぼ同種の文言が隋代成書とされる『無上秘要』卷二十七「上清神符品」に抄録されている。)

また後世のものではあるが、『道書授神契』には、禳妖除邪のための「符文」の記述に、

「古人用篆字、今之符文猶似之也。」との文が見られる。

6、注1所掲⑨張総氏論文、同⑩⑪⑫桐谷氏論文、及び同⑬筆者論文 参照。

7、泗水建興寺軌禪師碑(比丘尼智度等造像碑 大齊武平五年七月二十二日刻) (『北京大學圖書館藏中國歷代石刻拓本匯編』北朝第八册 中州出版社 一九八九・六 五九頁) 刻文による。

8、僧安の出自を東平乃至東平一帯を含む鄒魯の某所と見る説は、張偉然氏(『関于山東北朝摩崖刻経書丹人、僧安道壹、的两个問題』『文物』一九九九・一三) (『関于、僧安道壹、的再思考』) (『北朝摩崖刻経研究(三)』内蒙人民出版社 二〇〇六・七 七八〜八二頁)をはじめとする研究者のものがあるが、張総氏(注1所掲⑨論文 ほか)、桐谷氏(注1所掲⑩論文 ほか)等はこの見解をとられていない。出自自体を東平及びその一帯に推断する必要はないのではあるまいか。

9、柳田聖山「ダルマ禅とその背景」(『禅仏教の研究』柳田聖山集 第一卷 法藏館 一九九九・一二)、柴田泰「中国浄土教の系譜」(『印度學佛敎學』1 一九八六)、同「中国浄土教と禅觀思想」(『印度學佛敎學』3 一九八八)、任繼愈等「曇鸞和弥陀浄土信仰的發展」(『中国仏教史』Ⅲ 中国 社会科学出版社 一九八八・五 六〇六〜六一九頁。なお、柏書房 日本語翻訳版 一九九四・一二 六四三〜六一九頁)等 参照。

10、劉玉新「十一 故事傳説」3 曹植魚山聞梵(雷嘉正、劉玉新主編『東阿縣方誌輯要』山東聊城地区新聞出版社 一九九七・七 一四三〜一四五頁)、岩田宗一「声明」とはどういうものなのか、「声明」はやっぱり(『東寺真言宗声明大全

集刊行会 会員便り 一九九七・二〇 五四～五九頁) 等 参照。

11、注1所掲諸氏論著 参照。

12、注1所掲筆者⑩論文「邯鄲水浴寺東山石窟の銘文について」

(『学苑』783号 昭和女子大学近代文化研究所 二〇〇六・一 一三九～一五〇頁)、

「邯鄲鼓山水浴寺東山石窟銘文考釋」(『北朝摩崖刻經研究(三)』 内蒙古人民出版社 二〇〇六・七) 参照。

13、唐李百藥『北齊書』卷十四 列傳第六 「(上洛王思宗子) 元海傳」(中華書局

一九七二・一一 第一册 一八三～一八四頁)(唐李延壽『北史』卷五十一 列傳第

二十九 「齊宗室諸王傳 上」(上洛王思宗子元海傳)(中華書局 一九七四・一〇

第五册 一八五～一八五四頁)

14、唐李百藥『北齊書』卷四十七 列傳第三十九 酷吏 「畢義雲傳」(中華書局

一九七二・一一 第二册 六五九頁)(唐李延壽『北史』卷三十九 列傳第二十七

「畢衆敬傳附義雲傳」(中華書局 一九七四・一〇 第五册 一四二九頁)

15、唐道宣『續高僧傳』卷第八 義解四 「齊洛州沙門曇衍傳」(『大正新編大藏經』第五

十册 「史傳部 一」No.二〇六八 四七八中～四八八頁上)

16、唐李百藥『北齊書』卷四十三 列傳第三十五 「羊烈傳」(中華書局 一九七二・

一一 第二册 五七六頁)(唐李延壽『北史』卷三十九 列傳第二十七 「羊祉傳附羊

烈傳」(中華書局 一九七二・一一 第五册 一四三五～一四三六頁)

17、筆者の実査による。なお、筆者「大齊故昭玄沙門大統僧賢墓銘疏攷」(『学苑』

833号 昭和女子大学近代文化研究所 二〇一〇・三 五四～六七頁) 参照。

18、諏訪義純『中国中世仏教史研究』第二章 第四節 雲門寺 注10 (大東出版

社 一九八八・五 三〇七～三〇八頁)

19、唐道宣『續高僧傳』卷第二十五 習禪六 「衛州霖落泉釋僧倫傳」(『大正新編大藏經』

第五十册 「史傳部 一」No.二〇六八 六〇一頁下)

20、注17所掲筆者論文「II 新出の僧賢墓銘とその刻文」(『野馬崗東北二里』

(五五～六二頁) 等 参照。

21、実査による。なお、長庚敬雄「河北磁縣 河南武安響堂山石窟」(東方文化學院京都研究所 一

九三七・六 第一編 南響堂山石窟 三、石窟第二洞二〇頁及び圖版一五、二八、

四九、石刻例一、三 等)、曾布川寛「響堂山石窟考」二 南響堂山第二洞發見

の重修碑をめぐる(『東方學報』京都 第六十三册 京都大學人文科學研究所

一九九〇・三 一七八頁)、注1所掲馬氏⑥⑦⑧論文等 参照。

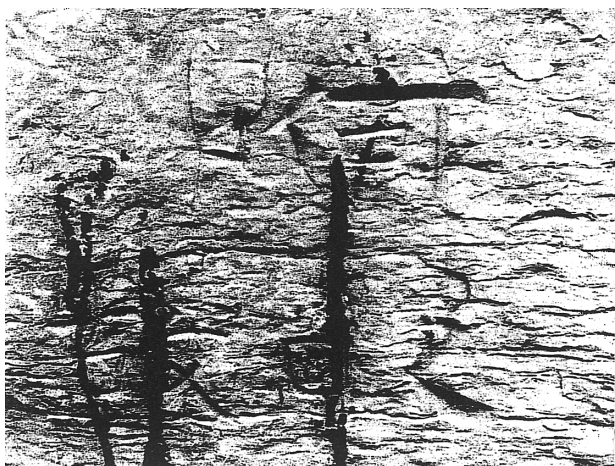
22、注17所掲筆者論文、釈文、拓影図版 等 参照。

23、注1所掲筆者⑩論文「III 沙門僧賢とその法系」三 僧稠の遺弟僧賢、図版

等 参照。

24、筆者「宇智川摩崖仏經石刻」(『武蔵野女子大学紀要』二十三号 同編集委員会

一九八八・一 五九～八二頁) 参照。



附図 龍山寨子頂摩崖刻經字
(拋 頼非氏「泰嶧山区刻經新資料及相關問題」図3)